
思いついたネタの集まり

AST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思いついたネタの集まり

【Nコード】

N1235Y

【作者名】

A S T

【あらすじ】

これは思いついたネタを書いては、投稿して置いておく所です。活動報告に書いておくのが面倒になったので、ここに纏めておきます。

基本的に思いつきなので内容が雑な文章になると思います。

レギオス 再生者レイフォン（前書き）

今回はレイフォン強化の話です。

書き方や話が雑なので、見たくない人は見ないで置いてください
あくまで連載や短編にするまでも無い程度の思いつきのネタです
から

レギオス 再生者レイフォン

移動都市にして最強の都市、槍殻都市グレンダン

そこにあるデルク・サイハーデンが経営する孤児院に一人の神父がいた。

「良いですか？暴力を振るって良い相手は、汚染獣と異教徒共だけです。わかりましたね？」

「「「「「はい」「」「」」」」」

神父の名前はアレクサンド・アンデルセン

今は亡き宗教都市『バチカン』の神父であり、武芸者である。

現在は孤児院の神父をしている。

「レイフォン・・・」

「自分のした事は分かっています。」

彼は孤児院を出て行く優しい弟子に話しかけた。

「お前のした事は確かに赦されない事だ。だが、そのお陰で孤児院の子供たちが飢餓に苦しまずに済んだ。礼を言おう」

「いえ、神父にそう言って頂けるだけで僕は満足です。」

すると、アンデルセンはある物をレイフォンに渡す。

「これはお前の服だ。それとこの鍊金鋼と聖書もな。」

「いいんですか？」

「ああ、お前は私の弟子だからな」

「ありがとうございます。神父」

レイフォンは直に神父服を纏う。

「お前は私とは違う。お前は自分の道を征け」

「はい！行って来ます。」

レイフォンはそう言って、孤児院を出て行くのだった。

「レイフォン・・・」

「リーリン、貴方も見送りぐらいはしてやりなさい」

「はい！！」

そう言って、彼の幼馴染も行く

そしてアンデルセンは空を見上げる。

「神よ、どうか彼らを見守りください。Amen」

時は過ぎ・・レイフォンの編入先である学園都市『ツエルニ』に汚染獣が襲撃してきた。

第十七小隊隊長ニーナ・アントークは初の汚染獣と交戦で、幼生体に苦戦し倒れてしまった。

彼女に襲い掛かる幼生体の牙。

しかし、その牙が彼女に届くことは無かった。

何故なら、何処からか飛んで来た大量の銃剣が幼生体の体を滅多刺しにしたからだ。

「なっ!?!」

周囲を見渡すと、他の幼生体も同じように大量の銃剣が突き刺さっている。

その時、足音と荒い息遣いがニーナの耳に聞こえてきた。

フー・・・フー・・・と言う獣のような荒い息使い

建物の影から出てきたのは、戦闘神父服をきたレイフォンだった。

「レイ・・・フォン・・・？」

レイフォンは残っていた幼生体を見据えると、両手に持った銃剣を十字に構える。

「我等は神の代理人。

神罰の地上代行者。

我等が使命は我が神に逆らう愚者を

その肉の一片までも絶滅する事・・・エイメン Amen!!」

レイフォンの眼がキラリと輝き、一瞬のうちに銃剣を投擲する。

大量の銃剣によって貫かれた哀れな幼生体は一瞬の内に絶命した。

「さて・・・大丈夫ですか？隊長」

「あ、ああ・・・」

レイフォンはニーナの傷を確認すると、懷から聖書を取り出し回復法術をかけた。

「なっ!？」

みるみる内に彼女の肩口の傷が塞がってゆく

「ちよつとした自己治癒の促進です。」

そつ言つて説明するレイフォン

粗方、彼女の治療が終わるとやって来た救護班に彼女を任せた。

「さて・・・来てくれると信じていましたよ・・・」

銀髪の美少女、フェリ・ロスに優しく語り掛ける。

「・・・今回だけですよ」

「充分です。」

カリアンを筆頭とした生徒会のメンバーに作戦を伝え、武芸科の生徒たちを防護柵の後方に下がらせる。

「作戦開始」

フェリの放った探索子から幼生体の数が伝えられる。

982体

「グレンダンにいた頃は万単位の幼生体に囲まれた事がある。」

そう言って、不安げになるフェリを落ち着ける。

「レストレーション02」

両手に持った銃剣を極細の鋼糸に変えて、幼生体を切り刻んでゆく。

「エ、エ、イメエエエエエエッ！！！！」

鬼気迫る迫力のレイフオンによって幼生体はたった3分で殲滅された。

「それでは行って来ます。」

都市外装備なしで汚染物質が蔓延する外へと向かおうとするレイフオンをフェリが引き止める。

『待ってください！都市外装備も無しに死ぬ気ですか！？』

その言葉にレイフオンは不適に笑いながら聖書のページを開いた。

すると、ページが勝手にパラパラと飛び上がりレイフォンの周りを囲んだ。

「これで問題なし」

そう言って、汚染獣の母体の元へと移動法術で向かった。

そこには巨大なトカゲにもドラゴンにも見える汚染獣が横たわっていた。

レイフオンは晒いながら告げるように言う

「貴様ら汚染獣は我が神の敵、よつて貴様に神罰を下す。」

レイフォンは高く飛び上がると両手に持った銃剣を汚染獣に振り下ろす。

A
m
e
e
e
e
e
e
n
!
!
!
!
!
!

振り下ろされた銃剣は寸分変わらず汚染獣の首を切り落としたのだっ
た・・・

ここに神罰の執行は完了した。

マニゴルド 異世界記（前書き）

今回はマニゴルドがネギまの世界に行きます。

マニゴールド 異世界記

「アンタもこれで塵芥だな！」

「貴様・・・ッ！！」

黄金聖闘士、蟹座のマニゴールドは死の神タナトスの寄り代である体と共に超次元へと飛び込み、己の命と引き換えにタナトス打倒の血路を開いた。

“後は任せたぜ・・・お師匠”

師であるセージに後を任せ、マニゴールドは散っていった。

彼の残った『小宇宙』はテンマとシオンに別れの言葉を告げて消えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ？」

死んだはずの彼が目覚めると眼に入っただのは、見たこともない天井だった。

「・・・・・・・・ここは何処だ？」

すると部屋のドアが開き中年の男性が入ってきた。

「やあ、気が付いたようだね。」

「アンタは？」

彼は柔らかな笑みを浮かべて答えた。

「僕の名前はタカミチ・Ｔ・高畑と言う」

「そうかい、俺の名はマニゴールドだ。で、ここは何処なんだよ？」

ふてぶてしい言い方ではあるが、これが彼なのだから仕方がない

「ここは日本にある麻帆良学園と言う所だ。」

「はあっ！？サムライとかショーゲンがいる国イッ！！？」

なんか間違った日本の知識を披露するマニゴールドにタカミチは説明する。

「ははは・・・確かに侍や將軍はいたけど何百年も前の話だよ？」

タカミチが何気なく言った言葉にマニゴールドは違和感を覚えた。

「ちょっと待て・・・今、何百年も前って言ったよな？」

「ああ・・・それがどうかしたかい？」

「今は何年だ？」

「今は2002年の四月だけど？」

「なッ!？」

マニゴルドはその言葉に驚愕した。

自分達がいた時代は良く分からないが、確か同じ黄金聖闘士である水瓶座のデジエルが言うには18世紀、1700年代だった。
アケリアス

“俺は300年後の未来に來ちまったって言うのかよ・・・”

タカミチの方も、何か察したらしく

「どうやら事情があるみたいだね。詳しいことは学園長室で話そうか」

タカミチはそう言って、マニゴルドを案内するのだった。

学園長室に入って、マニゴルドが見たのは少女と・・・ぬらりひよんだった。

「なあ、タカミチ。コイツは人間か？」

「初対面でいきなり酷いの・・・」

「あはは・・・一応は人間だよ。」

とりあえずマニゴルドは自己紹介をする。

「俺の名はマニゴールドだ。」

「わしは近衛近右衛門。この麻帆良学園の学園長をしておる。」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。」

フオフオフオと笑う学園長はマニゴールドに聞く

「お主はどうして学園の敷地に倒れていた？そしてお主は何者かの？」

「いいぜ、教えてやるよ。」

彼から語られるのは、神話より続く聖戦の歴史。

黄金聖闘士であり、死を司る神タナトスと戦って死んだ事

そして十八世紀の人間であることだった・・

「信じられんのう・・・」

「まあ、そうだろうな。俺だって信じられねえよ。」

「なら、『小宇宙』とやらを見せてみる」

「いいぜ、見せてやるよ。」

エヴァに言われて、マニゴールドは己の『小宇宙』を燃やす。

次の瞬間、三人が感じたのは魔力とは比べ物にならない程、強大

な宇宙だった。

「これが『小宇宙』・・・」

「魔力や氣とは比べ物にならないなんて・・・」

「・・・フツ、面白いな」

今度は学園長がこの世界についてと魔法についてを話した。

「へえ・・・魔法ねえ・・・御伽話だと思ってたんだがな。」

「お前の方がよっぽど御伽話だ。」

エヴァに突っ込まれるマニゴルド

「お前が吸血鬼で600歳のババアなんてなあ・・・」

「誰がババアだ!!」

マニゴルドに学園長は問う

「さて、これからお主はどうするつもりかの?」

「さあな・・・行く当てもねえよ。」

「ならば、ここで警備員として働いてみるのはどうかの?」

「警備員?」

「そうじゃ、ここは世界樹があるが故に狙われやすい。もちろん衣食住は保障する。」

「よし、乗った!」

その話を聞いてマニゴルドは即答した。

そして、始まる麻帆良での生活

「鬼か・・・さつさと地獄に帰りな!!」

鬼に向かって放たれるは黄泉路へ送る光

「積戸気冥界波!!」

「「「うわあああああつ!!!!?」」」

鬼共は地獄へと送り返される。

「副担任をして貰いたいのが・・・もちろん給料は出す。」

そう言われて、マニゴルドはA組の副担任になる。

「今日から、このクラスの副担任になったマニゴルドだ。よろしくな。」

「『『『『カッ』いいい』』』』!!』』』』」

騒ぎ出す乙女達

「お前らは幸せなんだぜ？まともに勉強できて、不自由なく暮らせるんだからな」

「先生・貴方はどういう人生を送ってきたのです？」

学習する必要性を感じない生徒に、贅沢だと言つマニゴールド

「私のことが見えるんですか!？」

「ああ・お前は どうしたい？あの世に送られるか・このまま
でいるか・・・」

自縛霊となった彼女にマニゴールドは問う

そして修学旅行

「『『『先生ええええつ!!』』』』」

「お前らには、まだ早えよ。マセガキ共」

口付けを迫る少女たちを相手にしないマニゴールド

「はあ~~~~いい男ですわ。あんさん」

「そうかい!そりゃ光栄だなッ!~!」

戦闘狂のゴスロリ少女に気に入られるマニゴールド

「悪いけど、君は危険だ。ここで消えてもらっよう。」

「はっ、かかって来な。チビガキ!!」

造られた少年と戦う

「久しぶりねえ、蟹座の黄金聖闘士さん」

「うげっ！またお前かよ。オカマ野郎」

異なる世界でも交戦する蟹座とナス

「でかけりゃ良いって訳じゃねえんだよ!!」

「マニゴールドさん!？」

「そこで見ていな、ネギ坊主。積戸気鬼蒼炎!!」

鬼火がスクナの魂ごと焼き滅ぼす。

「僕を鍛えてください!!」

「はあ？エヴァにでも言えよ・・・」

強くなるうとする少年はマニゴールドに頼み込む

「だからどうした？それが戦争つてもんだらうが!!」

「そんな・・・」

少年に現実を教えるマニゴルド

「久しぶりだな。蟹座の黄金聖闘士。」

「テメエ・・・」

「世界樹の魔力は貰ってゆくぞ」

「今度はちゃんとぶっ飛ばしてやるよ！クソ神！！」

死の神に再び挑むマニゴルド

「マニゴルドさんを殺させません！！」

「下らん！貴様も死ぬが良い！！テリブル・プロビデンス！！」

「マニゴルドさああん！！」

少年を庇い直撃を受けるマニゴルド

「へっ、見せてやるよ。人間の強さって奴をなあ！！」

「人間風情が神に歯向かうなど赦さん！！」

そして魔法の世界で神相手に死闘を繰り広げる。

果たしてマニゴルドは今度こそ神を打倒できるのか？

蟹座の異世界記、始まる・・・か？

とある神浄の仕事（前書き）

今回はクロスオーバーではありません。

上条スーパーハーレム状態です。

夢のドリーム軍団です。

では、どうぞ

とある神浄の仕事

清潔感漂う白を基調とした執務室。

部屋にドンと置いてある立派な机に黒髪ツンツンヘアの少年、上条当麻はぐったりと頭を乗せていた。

「うあゝ・・・不幸だ・・・」

すると、部屋に長い黒髪をポニーテールにした美女、神裂火織が入って来た。

「当麻、今回の書類です。」

ドンと机に置かれる書類の山を当麻はげんなりした表情で見ると

「なあ、火織。」

「何ですか？」

当麻は最近ずっと思っていた事を聞いた。

「何で、『神浄』になったら、書類仕事してんだろっ・・・？」

「仕方無いでしょう・・・世界や魂の管理が神の仕事なんですから」

「ただ座って地上を眺めているだけかと思ってた・・・」

「一般的に天使がやっているイメージですからね・・・」

彼等が居るのは天界、つまり神の世界である。

上条当麻は様々な戦いを経て『神浄』として覚醒する事で、世界を守り続けようとした。

で、今に至る訳だが・・・

「あの元神の爺さん。俺が天界に來た途端に笑顔で仕事押し付けやがった・・・」

「あの方も疲れていたのですね。」

「出張したり書類仕事する管理人の仕事だもんな・・・」

やれやれ、と当麻は溜息を吐く

「お前達も天使になって手伝ってくれるだけ有り難いよ」

「上条勢力だけで無く、全員協力してくれるとは思いませんでしたが・・・」

そう言う神裂は卑俗なる物を退け、熾天使や智天使の『愛』と『知恵』の振動で振り注ぐモノを受け止める上級天使第三位：座天使の階級に居る。

そして地上の奇跡を司る中級天使第五位：力天使の階級も兼任して居るのだ。

彼女は生前に聖人で女教皇であつたため、難局に対して勇氣を示し、力を振るつて鼓舞する役割はピッタリだった。

今度は美琴が部屋に入つて来た。

「当麻、この書類にサインしといてね。後、浜面が麦野と絹旗にブツ飛ばされてたわよ。」

「美琴、アイテムや元暗部の連中は基本的に能天使だよな？」

「ええ、そうよ。」

「浜面も階級は能天使だったよな？」

「ええ・・・」

「死ぬんじゃない？」

「大丈夫よ。能天使なんだから・・・多分」

“最悪骨は拾つてやる。死ぬなよ、浜面・・・”

当麻は消滅の危機に陥っている友にエールを送る。

美琴の所属は力天使であり、彼女も神の力を示し鼓舞をする役割を担っている。

ここで上条勢力の所属図を説明しよう

・神

所属：上条当麻（神名：神浄の討魔）、アレイスター・クロウリー

・上級天使第一位：熾天使セラフィム

所属：一方通行、上条当麻（兼任）、フィアンマ

・上級天使第二位：智天使ケルビム

所属：ローラ・スチュアート、インデックス、雲川芹亜、リエメア

上級天使第三位：座天使スローンズ

所属：キヤーリサ、ウィリアム・オルウェル、騎士団長、神裂火織、マタイ・リース

中級天使第四位：主天使ドミニオンズ

所属：オルソラ・アキナス、五和、ヴェント、リドヴィア・ロレンツエティ、マタイ・リース（兼任）

中級天使第五位：力天使ヴァーチユーズ

所属：キヤーリサ（兼任）ウィリアム・オルウェル（兼任）、神裂火織（兼任）、御坂美琴、風斬氷華、オリアナ・トムソン、レイヴイニア・バードウェイ・・・

中級天使第六位：能天使パワーズ

所属：騎士団長（兼任）、浜面仕上、アニエーゼ・サンクティス、シェリー・クロムウェル、一方通行（兼任）、サーシャ・クロイツェフ、ヴェント（兼任）、土御門元春、結標淡希・・・

下級天使第七位：權天使プリンシパリティーズ

所属：オルソラ・アキナス（兼任）、ルチア、ヴィリアン、吹寄制理、黄泉川愛穂、月詠小萌、アンジェレネ、リドヴィア・ロレンツエティ（兼任）、マタイ・リース（兼任）

下級天使第八位：大天使アークエンジェルス

所属：一方通行（兼任）、上条当麻（兼任）、フィアンマ（兼任）
・・・

下級天使第九位：天使エンジェルス

所属：天草式、アニメーゼ部隊、妹達シスターズ・・・

「すつげえ、面子だな・・・」

「それも貴方の人徳と云うものですよ。」

「そうそう・・・」

神裂の言葉に美琴も同意する。

「で、今度の出張は・・・と・・・ネギま？」

「そうらしいわ。詳しい事は書いてあるし、頑張りなさい」

「って、お前は？」

「アタシは黒子達と一緒にガンパレードの世界よ。」

「結構ハードだな・・・」

幻獣にやられやしないかと不安げになる当麻

そんな当麻を励ますように言う

「大丈夫よ！この美琴様が幻獣なんかには負けるとでも思ってたんの？」

「いや、あり得ないか・・・ビリビリだし」

「ビリビリって言うな！！・・・って、懐かしいわね・・・百年振りかしら？」

「ああ・・・それ位だな。」

その事に過ぎ去った年月の長さを感じる当麻

「今回も幻想殺しで力封じた状態か・・・火織、一緒に来てくれるか？」

「ええ、構いませんよ。当麻・・・」

頬を染めながら言う神裂に美琴は顔を顰める。

「むう・・・まあ、仕方ないわね・・・火織さん、当麻をお願いね？特に女性関係で・・・」

「分かっていますよ。美琴」

お互いにフラグ野郎の当麻にため息を吐きながら言うのだった・・・

「ちなみに一方通行はシロガナタケルが来ない並行世界に行くらしいわよ」

「BETAとケイ素生命体、終わったな・・・」

「他にも聖杯戦争にウィリアム・オルウェルが行くらしいですよ。セイバーの代わりに・・・」

「おい待て、何でだよ。」

「セイバーが呼ばれずに衛宮士郎が殺される世界だからです。」

「成程・・・アイツなら大丈夫か」

当麻は次に出張する世界に向けて準備する。

「何かあつたら、天草式も動かせるようにしておきます。」

「ああ、助かる。それと五和もサポートに連れて行くけど良いよね？」

「ええ、構いません。」

これは上条当麻が『神浄』へなつてからの物語

「アレイスターは？」

「エイワスと一緒に魔法少女と一緒に魔女を倒しています。」

「ローラは？」

「一方通行の裏方サポートとして、香月夕呼と一緒に悪たくみを・・・」

「キヤーリサ」

「並行世界に渡ろうとしているBETAの大軍を相手に騎士達を率いて戦っています。」

「皆頑張ってるなあ・・・」

当麻はそう呟くと、彼女と共に部屋を出て行くのだった・・・

とある神浄の仕事（後書き）

みんな、色んな世界で助っ人の仕事してます。

とある上条のIS（前書き）

上条さんとISのクロスです。

とある上条のIS

上条当麻は第三次世界大戦の中心で戦い抜いた。

今の世界を救うために大天使と戦って北極海で空中要塞『ベツレヘムの星』は崩壊

彼は二度目の死を迎える事となる。

ゴポゴポ・・・と冷たい水に沈んでゆく感覚だけが伝わってくる。

不思議な事に息苦しい事は無く、ただ意識だけが薄れて行く

“ここで終わるのか・・・？”

そう思いながら、意識が闇に消えゆく直前に彼の視界は光に包まれた。

その日、織斑千冬は外に出て今年の入学者の事を考えていた。

“アイツがISを使えるとはな・・・”

自分の弟が女性にしか扱えないISを使った事も何かの因果か・・・

そう思っていると、誰かが倒れているのを発見した。

“侵入者か・・・？”

そう思い近づくと、学生服を着た少年である事が分かった。

“何故、こんな所に少年が・・・？”

だが、良く見れば全身びしょ濡れで顔面蒼白だった。

急いで少年に近寄り、彼の体に触れると尋常ではない程冷たかった。

“何だ、この冷たさは！？冷凍庫にでも入っていたのか！？”

そう思った程、彼の体は冷えていた。

懷から端末を取り出すと、職員室に連絡してから彼を抱えて医務室へと向かった。

その彼の懷から白いネックレスが覗いていた。

何だか温かい・・・そう思った上条当麻が目を覚ますと、見覚えの無い景色が眼に入った。

「じじは・・・？」

室内を見渡すと医務室らしき所であると判断できた。

すると扉が開き、黒髪の女性が入って来た。

「どうやら気が付いたみたいだな。」

「・・・誰だ？」

当麻の問いに彼女は答える。

「私は織斑千冬だ。」

すると、当麻も自己紹介する。

「上条当麻です。所で・・・織斑さん。ここは何処ですか？」

「ここはIS学園だ。お前はそれも知らないで侵入してきたのか？」

「あい・・・えす学園って・・・何ですかというか、侵入者ってどういう事でせうか!？」

当麻の混乱した様子に千冬は彼を落ち着ける。

「とにかく落ち着け」

「はい・・・すみません」

落ち着いた彼に千冬は問う

「で、お前は どうしてこの学園に倒れていた？」

「分かりません。北極海に沈んだと思ったら、ここに居たんです。」

その言葉に驚く千冬

「待て、北極海にその恰好で沈んだのか!？」

「ええ・・・沈む要塞を操作するために・・・そう言えば第三次世界大戦はどうなりましたか？」

その言葉に千冬は違和感を覚える。

「第三次世界大戦だと？」

「はい、学園都市とロシアの戦争です。知りませんか?ここって日本ですよね?」

「・・・上条、お前の知っている事を全部話せ」

当麻は自分の住んでいた世界について話した。

学園都市、超能力、魔術、ローマ正教、魔術と科学の対立、これまで戦って来た事件

どれも荒唐無稽で信じがたい話だったが、当麻の眼は嘘をついているようには見えず、事実を淡々と述べているように見えた。

「そうか・・・どうやらお前の言っている世界とこの世界は違う様だ。」

「へっ？それってどういう事ですか？」

不思議そうにする当麻に千冬は自分たちの世界について教える。

IS、白騎士事件、女尊男卑、等々・・・

「嘘だろ・・・異世界なんて・・・」

衝撃を受けたように固まる当麻

その表情は約束を守れなかった事に対する自責の念に満ちていた。

絶望したような当麻を見て、千冬は言う。

「お前の持ち物を調べさせてもらったが、変わったものと言えば携帯電話か・・・」

そして、と千冬は続ける。

「このISをお前が持っていた事だ。」

千冬が取り出したのは、中央に青い宝石が填められた白いネックレスだった。

「えっ？俺、ISなんて持って無いですけど・・・」

「お前の服に入っていた。そして・・・お前が操縦者として登録されていた。しかもノーナンバーだ。」

そして、彼女は言う

「お前はこの学園に入学してもらつ。学費も免除、生活費も国から出る。」

当麻は問う

「何かあるんですよね？この不幸の体現者であるカミジョーさんにそんなうまい話が転がってくる筈がない」

「貴重な男性操縦者のデータ収集と研究だそうだ。解剖はされないだろうがな・・・」

「はぁ・・・まあ解剖は勘弁ですけど、データ位なら・・・」

そう言つて了承する当麻。

「では、ついて来い」

「分かりました・・・」

そう言つて当麻は用意された制服に着替え、ついて行つた。

格納庫に來た当麻は千冬と、もう一人の教師、山田真耶と一緒にいた。

「ISの機動行つ。装着するときには念じればいい」

「はい・・・えつとコイツの名前は・・・？」

「ああ・・・『ヤルダバオト』という名らしい」

「そうですか・・・」

当麻は胸にあるペンダントに念じる。

「展開!!」

当麻の体が光に包まれ、頭部から出ている髪の毛が特徴的な、赤を基調とした武者の様な外見のISが装着されていた。

露出は眼以外は無く、かなり珍しい外見だった。

「これがISか・・・」

「全身装甲とは・・・」

当麻は自分の感覚を確かめるように手を握ったり開いたりしている。

「次は飛行試験だ。飛んでみる。」

「分かりました。」

地面を蹴って一気に飛び上がった。

「うおオッ!!?」

出力が高すぎたのか、体制を崩してしまう

「落ち着け、出力を調整しろ。」

「は、はい・・・くっ・・・」

千冬の言葉に従い、ゆつくりと出力を調整し空中で静止する。

すると、慣れてきたのか、自在に飛び回る。

その様子は飛んでいると言うよりは、見えない足場を跳んでいる様だった。

「凄え・・・これがISか・・・」

当麻は感慨深く呟いた。

「次は戦闘テストだ。ターゲットを破壊しろ」

「はい・・・えっと・・・こうか」

すさまじい速度でターゲットに接近して、殴る蹴るの怒涛のラッシュを決める。

「一応、手からエネルギー波を放てるらしいぞ。」

「やって見ます。」

拳からビームのイメージと廬山昇龍霸のイメージを合わせて、拳を突き出す。

すると拳から獣を司ったエネルギー波が放たれ、ターゲットを破壊

した。

「ある程度の動きを補助してくれるのか・・・」

先ほど使った機神拳も勝手に体が動いたような感じだった。

「最後だ。その機体の最強技『轟覇機神拳』を放ってみろ」

千冬に言われて、最後のターゲットに向かって行く当麻

「『轟覇機神拳』！！」

ターゲットに次々と拳が叩き込まれ、上空に殴り飛ばした後放たれた巨大な龍の形のエネルギーがターゲットを飲み込んで爆発した。

その威力はアリーナの壁を簡単に破壊してしまった程だった・・・

「・・・・・・・・えつと弁償って事は・・・」

「安心しろ、それは無い。が、その技はIS戦に使うな」

「はい」

これでテストは終了した。

しかし上条当麻が苦勞するのは、これからだった。

「こんな電話帳みたいな本を覚えろなんてカミジョーさんには無理過ぎますって！！」

「無理でも覚える。私と山田先生が協力してやる。」

「いやいや！上条さんは元の世界でも英語の小テストが二十点のお馬鹿なんですよ！？」

「つべこべ言わず覚える。いいな」

「はい・・・」

千冬に殺気混じりに言われて、当麻は参考書相手に悪戦苦闘する破目になるのだった・・・

真耶が“私も手伝うから、頑張ろっね？”と言ってくれたのが救いだった。

そして、入学式の日

千冬は一組の全員に言う。

「さて、もう一人このクラスに入ってくる奴がいる。入れ」

戸が開き、入ってきたツンツン頭の少年を見て、織斑一夏は驚いた。

「男・・・？」

すると次々と黄色い声が沸きあがる。

「嘘！二人目の男性操縦者！？」

「意外とかつこいい!!」

それを千冬は黙らせ、当麻は自己紹介をする。

「上条当麻です。特に趣味はありませんが、不幸です。よろしくお願ひします。」

「いや、その自己紹介はどうなんだ？」

千冬が当麻に突っ込みを入れる。

「よろしくな、俺は織斑一夏。一夏でいいよ。」

「ああ、上条当麻だ。普通に当麻って呼んでくれ」

男二人、一級フラグ建築士二人が友情を結ぶ。

「よろしくね〜カミヤん」

「えっと・・・のほほんさん。その名は・・・」

「上条だからカミヤん。いいでしょ〜？」

のほほんさんから嘗てのあだ名を呼ばれる上条当麻

「よろしくな篠ノ之!」

「筭で構わない。」

「そうか、じゃあ俺も当麻でいいぜ。よろしくな篤!!」

「よろしく当麻」

一夏のファースト幼馴染と友好を結ぶ当麻

「お前は代表候補生なんだろう! だったら他の国や人間を侮辱なんてするんじゃない!」

「決闘ですわ!!」

「いいぜ・・・お前が人を見下すってんなら、まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

「あの・・・俺は・・・?」

出番や台詞をとられる一夏。

「よろしくお願いしますわ。一夏さん。当麻さん。」

「ああ・・・」

「よ、よろしくな」

“こいつ等、同類（フラグ野郎）か!!!”

同時に立つフラグと衝撃の事実に気づく篤

「中国代表候補生、鳳鈴音! 今日宣戦布告に来たってわけ!!」

“何か御坂みたいな奴だな・・・”

やって来た一夏のセカンド幼馴染に自分を案じてくれた少女を思い出す当麻。

「行くぜ、お前が俺の友達に手を出すって言うなら、そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

鈴と一夏へと襲い掛かる不明機に向かって行く当麻

「そんなんじゃないやねえだろ！お前はそのままでもいいのかよ!？」

「仕方ないよ。僕の言葉を聞いてくれる人なんて・・・」

「誰もいないんだったら、俺がお前の言葉を聞いてやる!」

「僕の言葉を聞いてくれるの・・・？」

「ああ、だから自分に救いが無いなんて言うな・・・そんな幻想、俺がぶち殺してやる。」

「俺も協力する!」

「ありがとう、一夏、当麻・・・」

フラグは基本二つ同時に立つ。

「お前たちを纏めて私の嫁にする!!」

「ええっ!!?ちよっ・・・!?!」

「はぁぁぁぁっ!!?!」

ラウラの言葉に混乱する二人。

「いちかぁぁぁ!!?とうまぁぁぁっ!!」

「不幸だぁぁぁっ!!?!」

怒れる鈴に銀髪のシスターを思い出す上条

「どっちが似合うと思う?」

「いや・・・その・・・私めは黒の方が・・・」

「赤くなって、可愛い所があるじゃないか」

「カミジヨールさんは、これ以上この空気に耐えろというのは拷問なんです!?!」

千冬にまでフラグが・・・?

臨海学校で

「あ・・・」

「きゃぁぁぁぁ!!」

シャルに当麻のラッキースケベが発動、水着が取れる。

「一夏さん・・・当麻さん・・・一体どっちにしたら・・・」

「うっ~~~~~悩む」

「僕も決められないよ・・・」

「二人とも私の嫁だ。」

箒以外に一夏と当麻のフラグが建っている。

「うおっ！？織斑先生、これは一体！？」

「騒ぐな、あいつらが起きるだろうっ？」

「ちよっ！？何このパラダイス！？夢じゃないんですか！？？」

束と当麻は出会う。

「これを使えば、元の世界に帰ることが出来るよ？」

「俺は・・・」

そして迫られる選択

とある上条のIS・・・連載未定！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1235y/>

思いついたネタの集まり

2011年11月4日15時24分発行